

報 告

## 近畿病院図書室協議会 第42回総会・第138回研修会 参加記

伊藤 友香

3月18日午前9時、京都駅の新幹線ホームに降り立つ。近畿病院図書室協議会（以後KHLA）に加入してから京都へ足を運ぶ機会が増え、巨大な駅構内でも迷うことがなくなった。いつ訪れても行きかう人々の数が多いが、例年より外国人が目立っていたように思う。そんな観光客のグループを横目に、会場である京都キャンパスプラザへ向かった。

第138回研修会の4つの議題はバラエティに富んだ内容であった。

第1演者の谷口裕美子氏は病院移転に伴った引越作業について報告されていた。移転後の広さが大幅に狭くなり、書架を長さで計算すると122.4mを51mまで減らさなければならなかったとのこと。発行が20年以上前の図書やオンライン化した洋雑誌など、それらをリサイクル本として再利用してもらっても段ボール200箱（約4,000冊）を廃棄したそうで、その作業だけでもさぞかし大変だったろう。新しい図書室は狭くなったとのことだったが、レイアウトを工夫され機能的で使いやすい印象を受けた。特にスライド式の書架を導入されており、その仕様がとても気になる。機会があればぜひ見学に行かせていただきたいと思った。

続いての中村さやか氏は、KHLAが開催している交流会に参加し、その経験をどのように仕事に活用したかという事例報告だった。残念ながら私は交流会に参加したことが一度もない。常々参加したいと思っていたのでとても興味深

く拝聴した。研修会・勉強会と交流会の違いは、そこが「交流」のための場であるということだ。つまりざっくばらんにおのおのが困っていること、他の図書室ではどのようにしているのかといった疑問について、和やかな雰囲気の中で情報交換できるのだ。交流会の担当者が参加しやすい雰囲気を作ってくれて、参加者の緊張もすぐにほぐれたようで、担当者のその心配りにもKHLAの優しさを感じられた。また、他館と自館の違いに気づいたこともあったようで、例えば中村氏の病院では雑誌購読については図書室ではない部署の担当だとか。所変われば……である。自分では当たり前のことも他の人にとってはとても有意義な情報になることが多々ある。今年度、交流会の参加を目標のひとつにすることにした。

第3演者の山本温子氏の報告は、これから図書管理システムを導入しようという方に、ぜひ聞いてほしい内容であった。所蔵構成、利用者側からの問題点、実際の利用状況、管理者からの問題点などを明確にし、それらを踏まえ丁寧に計画を立て実行されている。私も数年前システムを導入したが、ここまでちゃんと計画を立てておらず運用後かなり手間取った記憶がある。どのような図書室にしたいのか、私も再度考え直してみようと反省した。もうひとつ、とても参考になったことがある。山本氏の作成されたPowerPointのスライドである。イラストが豊富でページの展開もテンポが良く、とてもわかりやすかった。「システム導入の際の各社の比較スライド」は思わずクスッと笑ってしまう演出を

されていて、印象強く残っている。研修会に参加すると発表される内容だけでなく、付随する価値のある情報を入手することができる。そしてそれは自分の財産になる。私が京都まで毎年足を運ぶ理由のひとつがこれだ。

最後は中川かおり氏の県立図書館との連携の報告だった。神奈川県内でも病院図書館と公共図書館の連携を始めている市があり、鳥取県ではどのような取り組みをされているのか楽しみであった。そもそもは、がん相談支援センターの担当者の「がんサロンに図書コーナーがあればいいのにね」といった発言がきっかけになったという。その発言を受けて鳥取県立中央病院の院長先生がおっしゃった言葉がこれである。「病院の質を決める要因のひとつが図書館である」……なんて素敵なお話なのでしょう。そのチャンスを確実につかみ取り、そこから連携への道が始まったそうだが、ここまで来るには紆余曲折、さまざまなお苦労があったと推測する。だが、着実にその道は続いており、現在は職員用図書室・オアシス文庫・患者図書室と3つの図書室を運営されている。県立図書館からは年間3,000冊の資料を借り受けており、HPから予約ができるとか。急ぎの図書も翌日には届くそうで「患者さんを日常生活から切り離さない」環境を作られており、とても勉強になった。

第42回総会の記念講演「ケアの本ができるまで」では、編集者である医学書院の白石正明氏の貴重なお話を拝聴できた。ご本人は「末っ子なので〇〇したい!という気持ちが少ないし、相手の反応によって自分が変わる対話型」とおっしゃっていたが、心の中には1本のしなやかで、かつ頑丈な熱い想いを秘めていらっしゃる

印象を受けた。以下は講演を拝聴しながら取った私のメモの一部である。

- ・編集者末っ子説（講演向きは自立している長男）
- ・弱さに共感する編集者（自己啓発本：お前はもうできている!の反対）
- ・改変モデル→商人（証人・承認）モデルにしてしまう「べてる」がベースのシリーズ
- ・信頼関係（まずは自分が信じる。根拠もないけど相手を認め、信じる）
- ・刺激=感動 何かを変えようとするきっかけ
- ・好奇心のみ=相手を尊厳している（そのままを肯定、受け入れる）
- ・当人の能力ではなくてその人をどう見るかという「視線」そのものが問われている  
→変えるとしたら当人ではなく「当人をどうみるかという視線」である

正直私にとって、とても難解な内容であった。つかみ取れそうでつかめない、何かが見えそうで見えない。京都から戻ってからもモヤモヤした状態が続いた。そしてふと思った。そうだ、白石氏が伝えたいことを知るには本を読むのが一番の道ではないか。実は「シリーズケアをひらく」は医療や介護、教育に携わる人におすすめしたいと思い、職員用図書室に全て所蔵している。数冊は読んでいたのだが、これをきっかけにシリーズ全てを読破しようと現在、挑戦中である。余談だが、総会後の懇親会にて「病院図書館担当者長女説」が浮上した。編集者末っ子説を受けてアンケートしたところ、長女が圧倒的に多かったのだ。かく言う私も長女である。これをお読みの皆さまは、いかがだろうか。いつか統計をとってみるのも面白いかもしれない。